

Hop Step Jump

5

児童生徒理解を深めるために①

アンケートの声から

第 4 回初任研は発達障がいの子の特性の理解と授業づくり・学級づくりについて。講師の先生は、特別支援教育士スーパーバイザーであり、子育てサポート IdeCAT 代表の大谷和夫先生でした。先生は、池田市立石橋小学校元校長であり、池田市教育委員会事務局でも、特別支援教育の推進や条件の整備にむけて活躍された先生です。

本日の研修の中で、自分が受け持っている子どもたちの中にも、モデルが当てはまる児童がいることに気づきました。これからどのようにその子と関わっていくのか、授業の組み立て方、発問は分かりやすいものであるのか、改めて考え直す機会になりました。その児童はとても自尊心が低いです。このままでは自分の可能性にもフタをしてしまうかもしれないと日々考えています。今日の講義で聴いたことを活かし、その子の可能性を広げたいと思います。

LD、ADHD、高機能自閉などが言われ始めたころ、学校でもその診断に終始した頃があったように思います。分類名もなんだか難しい、～スペクトラムとか言われると、特別な何かと考えがちです。また、条約の批准などと言われてしまうと遠いことの様に感じてしまいます。でも、大切なことは目の前に実際に困っている子どもがいるということ。なぜ、できないのだろう…。また、やっちゃった…。あれえ…。

漢字練習とかクラスの中でも 1、2 をあそこくらいがんばっているのですが、漢字テストや実際文で書かせたりすると全く書けません…。何か対策をとりたいのですが、なかなか周りの先生に相談しても対応してもらえず悩んでいます。

こういった子どもたちの困り感に気が付かず、努力不足としたり、座れないことを頭ごなしに責め、説教や、居残り勉強させても、勉強嫌いの劣等生にしかならないでしょう。なかなか周りの先生に相談しても…対応する術を持ち得てないというのが事実かもしれません。でもその子たちの困り感に寄り添い「何とかしてあげたい」って考えている人もたくさんいるのも事実です。

私は、今日の研修で教えて頂いたようなことを大学でも学びました。学生時代、ボランティアとして現場に入っている、必要だと感じた知識理解だったからです。しかし、実際、そのことが日々に生かしているかというと、そうでもないような気がします。ただ、特別支援教育を特別にしないというのは私も感じます。少し苦手なことを周りよりもっているだけで、個性・特徴なんだと思い、見ています。ICF の構造図を使ってみたいと思いました。整理することで、明確に見えてくるものがあると思いました。

だからこそ個別の支援計画が必要であり、オーダーメイドの評価規準が必要になる。結果だけでなく努力を評価する仕組みや、コーチングなどの指導技術が特別支援の観点からも必要になりそうです。実は、知識基盤社会に対応するための 21 世紀型教育へのヒントも特別支援教育にある気がします。漢字テストはできなくても、ワープロで文章をつくり自分の意見を表現することはできるかもしれません。1 つの障壁を下げることで、より価値あるものを生み出せる可能性があるのです。

支援教育について何も知識がないまま教師になりました。大学生の時、小学校でボランティアをしました。そこで出逢った子どものことは忘れられません。幼稚園児のように走りまわり、授業中もとび出します。疲れ果てたところで教室に戻そうとしますが、嫌がって隣の教室で 2 人で黒板で遊びました。黒板いっぱい想像力あふれる絵を描いて説明してくれます。空を飛べるランドセル、ボタンを押すと、空になるコップ（いくら飲んでもなくなる！）、などなど 2 人で笑いころげていました。どう接したらよいかわからなかったけれど、素直に楽しかったです。こんな気持ちが今になっても忘れられない。今日はこんなことを振り返りました。

例えばもし、自分の子どもが自閉スペクトラム症だったなら、あなたの学校に安心して我が子を預けられますか。またその子の将来に希望が持てるでしょうか。教育が目指したいのは、誰もが排除されない教室。教室はインクルーシブな世界のはじまりです。